

公契約を希望に変えよう

公契約は、希望を秘めています。

ある自治体は、障害者雇用に熱心な事業者を優遇し、福祉のまちづくりを進めています。

ある自治体は、男女がともに意欲に応じて活躍できる取り組みを行っている事業者を公契約で優遇し、男女共同参画のまちづくりを進めています。

ある自治体は、環境配慮を重視する事業者を公契約で優遇し、エコなまちづくりを進めています。

ある自治体は、入札からブラック企業を排除し、地域の雇用を守る事業者を育成しています。

ある自治体は、事業者が労働者に支払うべき最低報酬額を定め、入札への参加資格とし、安心して働いていけるまちづくりを進めています。

公契約は、自治体のあり方を映す鏡です。

私たちの暮らしを支える橋や道路や水道などのインフラは老朽化しているのに、これを維持する職人や技術者たちがいなくなりました。ダンピング競争のあおりを受けて彼らの技術は買い叩かれ、仕事を続けることに希望が持てなくなったからです。

自治体からの委託事業を年度途中で投げ出す事業者や生活保護水準以下の賃金しか支払えない事業者が存在し、貧困や絶望と隣り合わせで働いている人たちが現れています。

これらの背景には自治体の財政難が存在します。しかし、行き過ぎた価格競争を放置すれば、地域の経済や雇用、住民の暮らしに大きなゆがみをもたらすこととなります。

これもまた公契約が秘める一面なのです。

公契約を変えましょう。愛知から希望のあるものに。

それは私たちの意志により、変えられるのです。

2014年2月11日

公契約のあり方を考えるシンポジウム